

Culture + Commons / 雲亭 読書版

おくのほそ道

原文と現代語訳で、一冊をたどる。

松尾芭蕉 / 雲亭 編



旅の地図 / 古典への寄り道 / 書き込み欄

全56節と、関連する4作品の選録

試刊 / AI試訳・専門家未校閲 / 2026年9月

この冊子の読み方

原文と訳を見比べ、気になった言葉を書きとめるための読書版です。サイトでの全文閲覧は引き続き無料。冊子では、旅の全体像と、別の古典へ寄り道する道筋を手元で確かめられます。

左に原文、右に現代語訳

段落のまとまりをそろえて並べています。長い節は次のページへ続きます。原文の旧字や仮名遣いを残し、異文注などは巻末の出典から確認できるようにしました。

日付と、語られていること

本文中の月日は旧暦です。現在のカレンダーと同じ月日ではありません。また、神社や寺の由来、歌人の逸話は、作品がそのように伝えている話として読みます。現代の歴史研究で確定した事実とは分けてください。

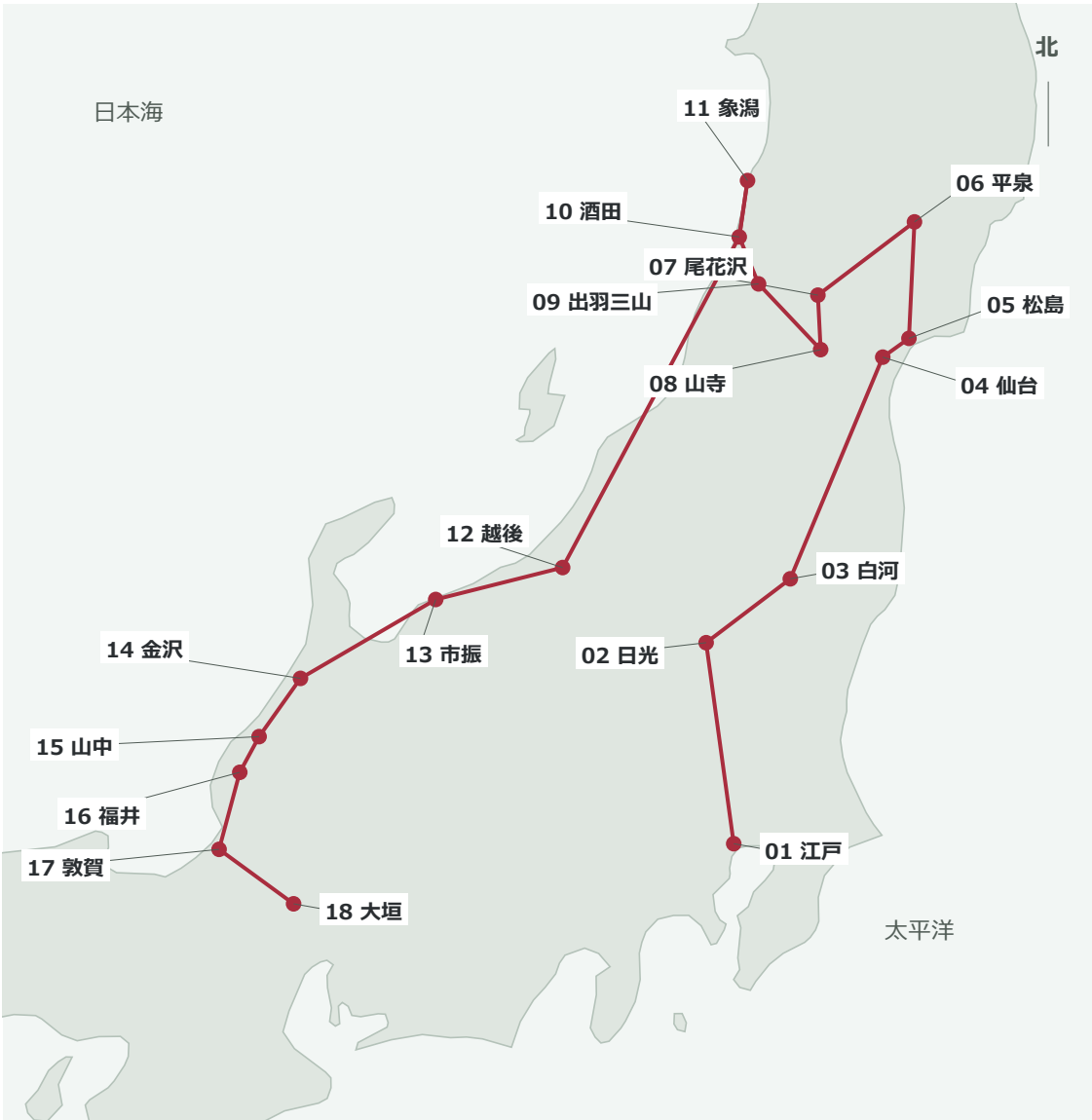
確認したことと、残っていること

保存した提供元本文との転記照合を行い、全56節の訳をAIで再点検しました。語義の取り違いや、読みを狭めすぎる表現は修正しています。独立した専門家による校閲と、原典画像との一字ずつの校合は未実施です。学術校訂版や現代語訳の定本としての刊行ではありません。

地図は読書の目印

次の図は本文で巡る主な土地を現代の地図上に置いた概略図です。赤線は読む順序をつないだもので、当時の道路や正確な踏査ルートではありません。本文の叙述順と実際の旅程も、必ずしも一致しません。

旅の見取り図



江戸から北へ。平泉を経て山形へ入り、象潟から日本海側を南下し、大垣へ。図の位置は地域を把握するための目安です。海岸線は現代の概略で、象潟などの江戸時代の地形を復元していません。

背景地図：Natural Earth 1:50m Land / Public Domain。経路・ラベル：雲亭。本文の地名から主な地点を選び、現在の地域の概略位置に配置。

地図データの出典と利用条件

本文 / 01

旅立ち

おくのほそ道 / 松尾芭蕉 / 第1節 / 全56節

原文	現代語訳 / 雲亭の試訳
月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふるものは、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。	月日とは、永遠に行き過ぎてゆく旅の客であり、去ってはまた来る年も旅人である。舟の上で一生を送り、馬のくつわを取って年老いてゆく人は、毎日が旅で、旅そのものを住まいとする。昔の人にも、旅の途中で亡くなった人が多くいる。
予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず海浜にさすらへ去年の秋江上の破屋に蜘蛛のふるすを拂ひてやゝ年もくれ春立る霞の空に白川の關越んとそゞろ神の物につきて心をくるはせ道祖神のまねきにあひて取物手につかずもゝひきの破れをつどり笠の緒付かへて三里に灸すゆるより松島の月先心にかゝりて住る方は人にゆづり杉風か別墅に移るに	私もいつの年からか、風に誘われる一片の雲のように、さすらいの思いがやまなくなつた。海辺を旅し、去年の秋、川のほとりの荒れた庵に戻って古い蜘蛛の巣を払ったが、そうするうちに年も暮れた。春が来て空に霞が立つと、白河の関を越えようと、旅へ駆り立てる神に取りつかれ、道祖神にも招かれるようで、何も手につかない。股引の破れを繕い、笠の緒を付け替え、脚の三里に灸をすえるころには、もう松島の月が心に浮かんでいた。住んでいた庵を人に譲り、杉風の別宅へ移るにあたって、
草の戸も住かはる世はひなの家	草ぶきのこの家も、住む人が替われば、雛人形を飾る家になるのだなあ。
おもて八句を庵の柱にかけおき	この句から始めた連句の最初の八句を、庵の柱に掛けておいた。

この一節を読むために

この本の読み方

江戸での旅立ちから、大垣を発つ結びまで全文を収録。56節の区切りと見出しは雲亭によるものです。日付は旧暦。現代語訳はAIによる試訳です。

おもて八句

連句の最初の八句。ここでは冒頭の発句だけが本文に記されています。

[この節の原典画像を開く](#)

資料の所蔵：中京大学図書館 / 採用した翻刻とは版が異なる場合があります。

書きとめる / 気になった言葉、もう一度読みたいところ

本文 / 12

遊行柳

おくのほそ道 / 松尾芭蕉 / 第12節 / 全56節

原文	現代語訳 / 雲亭の試訳
また、清水流るるの柳は、蘆野の里にありて、田の畔に残す。この所の郡守戸部某の「この柳見せばや」など、折々にのたまひ聞こえ給ふを、いづくのほどにやと思ひしを、今日この柳のかげにこそ立ち寄り侍りけれ。	あの「清水が流れる柳」は蘆野の里にあり、田のあぜに残っている。この土地を治める戸部という人が、折に触れて「この柳をお見せしたい」と言ってくださっていた。どのあたりだろうと思っていたが、今日、その柳の陰に立ち寄ることができた。
田一枚うへて立ち去る柳かな	田んぼ一枚の田植えが終わるほど、柳のそばで時を過ごした。そして立ち去る。

この一節を読むために

清水流るるの柳

西行の歌の言葉を踏まえる。「新古今和歌集」第262歌と読み比べられる。

田一枚

ここでは、田植えが進む間の滞在を詠んだものとして訳した。芭蕉自身が田植えをした、と本文にない動作は補っていない。

底本の読み

本資料は「立より侍りけれ」を採り、異本の「つ」を注記する。他の版との違いを原文欄に残した。

別の古典へ、寄り道する

道のべの柳 / 85ページ

つながりを読む / 古歌を踏まえる

芭蕉の柳に、なぜ西行の歌がつながる？

芭蕉の「清水流るるの柳」には、西行の歌と共通する言葉が含まれています。柳を見た旅の文章から、その言葉のもとになった歌へ進めるつながりです。

おくのほそ道 / 遊行柳

また、清水流るるの柳は、蘆野の里にありて、田の畔に残す。

芭蕉は、訪ねた柳をこの言葉で紹介します。

新古今和歌集 / 道のべの柳

道のべに 清水流るる 柳かげ
しばしとてこそ 立ちとまりつれ

西行の歌にも、同じ言葉と柳の陰が現れます。

知ると、こう読める

「柳の陰に立ち寄る」という場面にも注目すると、芭蕉が見た景色に、昔の歌の景色が重なっていると読めます。

ここで確かめられるのは言葉の対応です。西行が実際に蘆野のこの場所で歌を詠んだかは、確定していません。

背景

西行は芭蕉より前の時代に生きた歌人です。『新古今和歌集』に収められたこの歌では、清水の流れる柳の陰に立ち止まります。芭蕉は蘆野の柳を訪ねた場面で、その歌を思い起こさせる言葉を使っています。

芭蕉db「遊行柳」―歌との対応を解説

那須町「遊行柳」―詠んだ場所についての伝承

古今著聞集

中川聡「やたがらすナビ」宮内庁書陵部本『古今著聞集』第171話の校訂本文。

校訂本文を6段落に分けて転記。読みやすい原文では括弧の読みを外しています。訳は雲亭が新規作成したAI試訳。写本との独立した校合・専門家校閲は未実施です。

採用本文の提供元

校訂本文：中川聡（やたがらすナビ）「古今著聞集」第171話。

CC BY-SA 4.0

脚注番号と括弧の読みを整理し、段落・注記・AI試訳を追加。この掲載本文とその翻案部分は同じライセンスで公開します。

利用条件

古典作品そのものと、現代の校訂本文や編集の権利は区別しています。古今著聞集の校訂本文とその翻案部分はCC BY-SA 4.0です。Wikisourceの提供条件と版ID、各所蔵者の画像利用条件も、リンク先で確認できます。冊子の購入によって、各資料のライセンス上の権利が制限されるものではありません。

Wikisourceの著作権に関する方針

原典画像はこの冊子には転載していません。各節から所蔵機関の画像へリンクしています。表紙の定家葛は雲亭の制作に提供された写真です。地図の陸地データはNatural EarthのPublic Domainデータを使用し、雲亭で経路と地名を加えています。

編集と校閲状況

編集：Culture + Commons / 雲亭。現代語訳と解説：AIによる編集・再点検。専門家の独立校閲と原画像校合は未実施。2026年9月10日版。誤りや読みづらさが見つかった場合は、サイトの最新の本文と更新案内をご確認ください。

雲亭の無料読書室